

S. R. Brown “Colloquial Japanese” の名詞

——原典 “Lexilogus” にブラウンが加えた例文を中心に——

本 間 美 奈 子

1. はじめに

アメリカ人宣教師ブラウン (Samuel Robbins Brown) は、1859 (安政6) 年11月に来日し、1863 (文久3) 年に『Colloquial Japanese (以下『会話日本語』とする)』を出版した。『会話日本語』の中核である「会話文集」は、英語例文をアルファベット順に配列し、その文に対応する丁寧体・普通体の原則2種の日本語例文を提示した例文対訳集である。『会話日本語』では触れられていないが、ブラウンの書簡をまとめた高谷道男 (1965) の1860年12月31日付書簡には、次のように「会話文集」の原典が記されている。

わたしの研究をすすめるため、また、日本語の知識を得たい人々に役立つため、英語の慣用句の書物を会話体の日本語に訳すことにいたしました。その書物というのは、マラッカの英華学堂 (Anglo-Chinese College) で出版された「辞典」(Lexilogus) のことです。わたしが1841年マラッカを訪ねたとき、レグを助けて、その「辞典」を広東の口語体になおしたことがあります。

そこで、『Lexilogus (以下『原典』とする)』の英語例文と「会話文集」の英語例文とを対照したところ、ブラウンは『原典』をそのまま日本語に翻訳したのではなく、自作の例文を加えて「会話文集」を編纂したことが明らかになった。「会話文集」の英語例文全1273文は次の3タイプに整理できるが、ブラウンが加えた例文は28%を占めている。「会話文集」と『原典』の関連を明らかにした研究に常盤智子 (2016)、シュテファン・カイザー (2017) があるが、英語例文の一致率は前者が75.4%、後者が80%程度で

異なりがある。本稿の一致率は72%であるが、異なりの一因として類似例文を部分一致とするか否かという判定の相違が考えられる。本稿では意味の側面に重点をおいて判定を行った。

- | | |
|--------------------|------|
| ①『原典』をそのまま使用した英語例文 | 619文 |
| ②『原典』を部分的に変えた英語例文 | 297文 |
| ③ブラウンが加えた英語例文 | 357文 |

『会話日本語』の編纂目的に「日本語の知識を得たい人々に役立てるため」と記されていることから、タイプ②③に対応する日本語例文には日本に特化した名詞が提示されていると考えられる。とくにタイプ③は、英文や漢文からの翻訳ではなく日本で収集した名詞が含まれていると推測できる。そこで本稿では、ブラウンが加えた英語例文に対応する日本語例文にのみ提示される名詞の特徴を明らかにするために、名詞に『分類語彙表』の分類番号を付与し、意味分野に分類したうえで考察する。

2. 資料

2-1. 『Lexilogus (『原典』)』

「会話文集」の『原典』は、ジェームズ・レグ (James Legge) が1841年にマラッカの英華学堂 (Anglo-Chinese College) で出版した口語例文対訳書である。レグの名は『原典』に記されていないが、本稿では上述の書簡を裏付けのひとつとして捉えている。『Lexilogus』は例文集のみで文法解説や単語集、索引は設けられていないが、書名に基づき『辞典』(高山道男1965)『字典』(杉本つとむ1999)のように訳されている。

『原典』の構成は、序文、音声 (マレー語の母音、粵語の母音・二重母音・子音)、口語例文の対訳からなる。全1205文の英語例文をマレー語、中文、閩南語、粵語に対訳して見開き2ページに横並びに配置している。例文には場面が与えられておらず、前後文との関連もない。また、例文には番号が振られておらず、提示順にも規則がない。最終ページは111であるが、106、108から111ページにわたり打番違いがあるため、全115ページと

なる。

序文には口述された粵語音をブラウンが書きとめたことが記されており、『原典』の編纂に関わっていたことが確認できる。

なお、本稿では国会図書館所蔵本、カリフォルニア大学所蔵本を用いた。

2-2. 『会話日本語』

『会話日本語』は、ブラウンが1863年に上海の長老派協会伝道団印刷所 (Presbyterian Mission Press) から出版した日本語研究書である。

『会話日本語』の構成は、序文、表記法、日本語文法序説、会話文集、対話編、度量衡、貨幣、単語の英和索引からなる。本稿で取りあげるのは『原典』に基づく「会話文集」である。例文は英語例文文頭のアルファベット順に配列されているが、場面は与えられておらず、前後文との関連はない。英語例文には番号が振られており、最終番号は1270であるが、番号が二重に使用されているものが1例文(No.404)、番号なしが2例文(No.603とNo.604の間、No.737とNo.738の間)あるため実際は1273文となる。英語例文1文に対し、原則として丁寧体・普通体の日本語例文を提示しているが、日本語例文の数は一定ではない。対応する日本語例文が1文のものが70例、2文のものが1200例、3文のものが1例、4文のものが2例あり、日本語例文は合計2481文になる。

日本語例文は全て大文字のカタカナで示され、促音、拗音の別がない。また、表記には揺れがある。本稿では表記および音声を取りあげないため、表記は意味に基づき便宜的にひとつにまとめて扱うこととする。

上述のように『原典』には文法解説や単語索引がなく、例文の提示順にも規則がないため、ブラウンは実用面に留意して「会話文集」の体裁を整えたと考えられる。高谷道男(1965)によれば、1860年12月31日付書簡でブラウンは例文の提示順、索引に触れ、「でき上がったなら、普通用いられている文章を集めたものばかりでなく、その書物の中に出てくる英語と日本語の単語集ともなるでしょう」と語の検索を可能にして利便性を高める改善を行ったことを示している。1863年8月25日付書簡には横浜英学所で『会話日本語』が役立っているとの記述があり、改善は双方向利用を見越したも

のとも捉えられる。

来日以前のブラウンの日本語学習歴は明らかではないが、高谷道男（1965）によればアメリカから日本までの半年の船旅の間、ブラウンが指導者となって日本語勉強クラスを編成している。また、ブラウンは日本渡航以前に宣教していた中国で漢文を習得しており、『会話日本語』の編纂と並行して、漢訳聖書と S. W. ウィリアムズが訳した日本語訳聖書の原稿をもとに、日本語教師とともに聖書の和訳を進めている。

来日後、ブラウンはヘボンが借りていた神奈川の成仏寺に住まうことになった。グリフス（1991）によれば、「宣教師の身の安全を確保するために、日本政府はヘボンらが住む寺の周辺に頑丈な高い塀を巡らし、門には4人の侍を配置した」という。日本人の使用人もいたが、「為政者は日本の言語をはじめ、国民生活に関して、外国人に知られることを警戒していた。外国人の周囲にいる教師、召使、魚や野菜の行商人、果ては門の警備員に到るまでがことごとく政府差し回しのスパイで、頻繁に訪ねてくる地元の役人たちまでが同様であった」とある。本稿ではグリフスの記述を精査できないが、高谷道男（1961）によれば1861年の春頃ヘボン夫人が日本人に棍棒で打たれるという事件があり、日本語研究に適した環境ではなかったことがうかがえる。

しかし、高谷道男（1965）の1860年12月31日付書簡には、アメリカ公使ハリスの紹介で3月中旬以降に江戸で日本語教師（矢野隆山）を雇い入れたこと、『会話日本語』の3度目の改訂を行っていることが記されている。雇い入れから9か月ほどの間に、編纂作業が進んだことがわかる。1860年4月1日にはゴープルが来日し、成仏寺に住まっている。高谷道男（1961）には、漂流によって英語を習得することになった日本人仙太郎（サム・パッチ）がゴープルの従者をしていたことが記されている。また、バラ（1992）にはピジン・イングリッシュを話す召使の記述がある。このような言語環境が丁寧体・普通体2種の対訳に影響したと考えられる。

日本における名詞の収集期間および原稿の執筆期間については、不明な点が多い。上述のように高谷道男（1965）の1863年8月25日付書簡には、横浜英学所で『会話日本語』が役立っていると記されており、印刷期間も含

め来日から3年半ほどで出版されている。ブラウンの書簡から編纂過程をたどると、1860年12月31日付書簡で『会話日本語』の3度目の改訂に触れており、1861年8月16日付書簡では、原稿を40ページに分割して上海の印刷所に船便で送っていることが記されている。また、1862年2月18日付書簡では原稿の主要部分は上海に送付済みだが印刷が遅れていること、10月にブラウンが上海に渡航して3週間ほど印刷監督を行ったことが記されている。「会話文集」の英語例文がアルファベット順に配列されていることや上述の編纂過程を見る限り、名詞の収集期間および「会話文集」の執筆期間は、来日から1861年10月中旬までの約2年と推測される。

なお、本稿では大正大学所蔵本を資料に用いた。

3. 調査の概要

3-1. 『会話日本語』と『原典』の対照

上述のように、意味の側面に重点を置いて『原典』と「会話文集」の英語例文を対照して整理した。判定基準は、次のとおりである。①『原典』と同文あるいは語順が入れ替わっていても文意に影響がないものは同文として扱い、「原文」に分類する。②英語例文の一部の語を別の語に入れ替えたものおよび『原典』の英語例文を利用して作文したものは「改文」に分類する。③『原典』の例文と一致しないものは「独自文」に分類する。

3-2. 名詞の収集と分類番号付与

「会話文集」の日本語例文には丁寧体と普通体とがあり、位相を表そうとしていることから両文の名詞を収集した。収集にあたり名詞および意味の判定基準として『日本国語大辞典』を用い、『江戸時代語辞典』『江戸語大辞典』『和英語林集成：初版・再版・三版対照総索引』を参照した。また収集する名詞の範囲から、日本語と英語とで品詞が異なる代名詞を除いた。その結果、収集した名詞の異なり語数は961語、のべ語数は3325語となった。本稿では異なり語を中心に考察する。

さらに独自文にのみ提示される名詞を抽出するために、英語例文をもとに分類した①②③のふたつ以上の文のタイプで使用される日本語例文の名詞を調査し、分類D（以下「共用」とする）として分離した。したがって、日本語例文の名詞は次の4タイプに整理できる。名詞の語数は、独自文が最も多い。

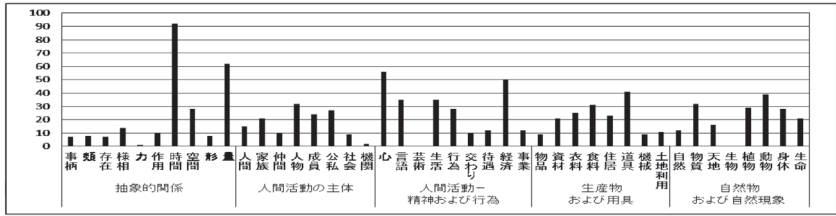
A 原文にのみ提示される名詞	226 語
B 改文にのみ提示される名詞	168 語
C 独自文にのみ提示される名詞	344 語
D 英語例文分類①②③のふたつ以上のタイプで提示される名詞	223 語

次に、個々の名詞に意味の分類基準となる『分類語彙表』の分類番号を付与した。分類番号は類、部門、中項目、分類項目の4層構造になっており、名詞は体の類になる。部門には抽象的關係、人間活動の主体、人間活動—精神および行為、生産物および用具、自然物および自然現象の5部門がある。部門の下位の項目として中項目があり、中項目はさらに細かい分類項目に分かれている。付与においては、田島毓堂（1999）で指摘されたように複合語の取扱いが問題となったが、本稿では原則として複合語は要素に分解して扱った。

4. 名詞の分布と考察

分類番号を付与した「会話文集」の全名詞を部門ごとにまとめると抽象的關係 237 語、人間活動の主体 139 語、人間活動—精神および行為 238 語、生産物および用具 170 語、自然物および自然現象 177 語で、合計 961 語となる。名詞を部門・中項目に分類すると次のような分布になる。グラフの縦軸は異なり語数である。なお、「会話文集」には中項目「芸術」「生物」の名詞は使用されていない。

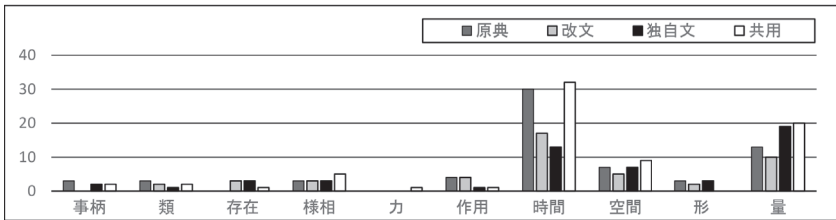
グラフ1：「会話文集」の名詞の分布



以下、部門ごとに原文、改文、独自文、共用の4タイプに分類したグラフを示す。グラフを概観した後、部門に分類される独自文の名詞を表に示したうえで考察する。

4-1. 抽象的關係

グラフ2：部門「抽象的關係」の名詞の分布



部門「抽象的關係」の異なり語数 237 語のうち独自文の語数は 52 語で、21.9%を占めている。中項目はグラフのように 10 項目あるが、「時間」と「量」の語数が突出している。語数が最も少ない「力」は、独自文には使用されていない。なお、グラフの縦軸は異なり語数である。

表1：独自文「抽象的關係」の名詞一覧表

部門	中項目	独自文【分類項目】名詞(漢字・意味)度数
抽象的關係	事柄	【事柄】シヨシキ(諸式)2、ヘン(変)1
	類	【異同・類似】ドウ(不同)2
	存在	【出沒】ヒミツ(秘密)1、ナイシヨウ(内緒)1 【発生・復活】ゼンビヤウ(前表)2
	様相	【特徴】タダ(只)1、ツネ(常)1 【調節】テツゴウ(手都合)2
	作用	【終了・中止・停止】テウジ(停止)2
	時間	【時期・時刻】イソゴロ(いつ頃)1 【毎日・毎度】イクタビ(幾度)1、ナンド(何度)1 【時代】ヨ(世)1 【日】ニチ(日)2 【朝晩】ニツチウ(日中)1、マヒル(晝星)1 【現在】コンシ(今年)2 【過去】イツサクジツ(一日)1 【未来】ケンジツ(近日)2、ミヤウアサ(明朝)2 【順序】ヒノベ(日延)2 【時間的前後】トウジ(当時)3
	空間	【空間・場所】ヨノ(他所)2、ナンジヨ(難所)2 【方向・方角】ヨホウ(四方)2 【中・隔・端】カド(角)1 【面・側・表裏】マイ(枚=ページ)2 【内外】ウト(外)1 【形・型・姿・構え】エスガタ(絵姿)2
	形	【玉・凸凹・うず・しわなど】ヨリ(摺り)2 【模様・目】ブチ(斑)2、ヌイメ(縫い目)1
	量	【数】ケンヌウ(軒数)2 【長短・高低・深淺・厚薄・遠近】オクニキ(奥行)2、マガチ(間口)2 【速度】タイソギ(大急ぎ)1 【軽重】メカク(目方)2 【程度・限度】カギリ(限り)2 【過不足】オチ(落ち)1 【一般・全体・部分】ミンナ(皆)1、ミナミナ(皆々)2、オノオノ(各々)2 【群・組・対】ソウホウ(双方)1、リョウホウ(両方)1 【数記号(一ニ三)]ムツ(六)2、ヨウ(四)2、ハン(半)4、ヨツタリ(四人)2 【順位記号(甲乙丙)]ロクツク(六月)2 【数値接辞(分・通算単位)】3、ソウ(総)1

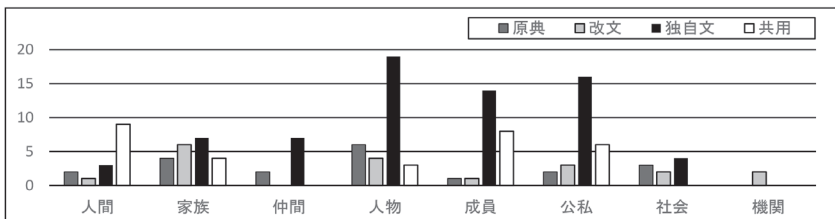
独自文には使用されていない中項目「力」は、表 1 から除いた。

中項目「時間」は『会話文集』の中で最も語数が多い意味分野となっているが、これはブラウンが時間表現を重視した結果と考えられる。しかし、4 タイプの文のうち独自文の「時間」が最も少なく、14.1%となっている。時間に関する名詞は共用、原文を中心に豊富に提示されており、足りない表現を独自文や改文で補ったと推測される。注目すべきは、中項目「量」の下位分類「数記号（一二三）」のムツ、ヨツ、ハンである。江戸と西洋の時刻制度の相違は『会話日本語』で解説されているが、例文で対照して示す目的があったと考えられる。

中項目「空間」には 에스ガタがある。英語名詞は「portrait」であるが、丁寧体・普通体の両方で 에스ガタが提示されており位相は示されていない。中項目「存在」のヒミツ（丁寧体）とナイシヨウ（普通体）、中項目「時間」のニツチウ（丁寧体）とマヒル（普通体）のように 2 種の文体で異なる名詞を提示する場合もあるが、名詞は文体ほど明確な位相差がみられない。この点について、加藤知己（1998）は、「文体への配慮による訳し換えとは別に、時には多様な語彙を示す意図でなされた訳し換え」があったのではないかと指摘している。ブラウンは位相を表す目的のほかに関義語を示す目的で 2 種の文体に異なる名詞を掲げたと考えられる。

4-2. 人間活動の主体

グラフ 3：部門「人間活動の主体」の名詞の分布



八

部門「人間活動の主体」の異なり語数 139 語のうち独自文の語数は 70 語で 50.4%を占めており、他の 3 タイプの文の合計を上回っている。

中項目は、グラフのように 8 項目ある。グラフ全体を概観すると、「人物」「公

私」「成員」の独自文の語数が突出している。「機関」は、独自文には使用されていない。

表2：独自文「人間活動の主体」の名詞一覧表

部門	中項目	独自文【分類項目】名詞(漢字・意味)度数
人間活動の主体	人間	【人間】ヒトビト(人々)2 【神仏・精霊】カミ(神)1, カミサマ(神様)1
	家族	【家族】カナイ(家族の内)2 【夫婦】オツト(夫)1 【親・先祖】ハハ(母)1 【子・子孫】コドモシウ(子ども衆)1、ミナゴ(孤児)2 【親戚】シムルイ(親類)3、ミヨリ(身寄り)1
	仲間	【相手・仲間】アダ(仇)1、カタキ(敵)1、テキ(敵)2、ミカタ(味方)2、ホウバイ(朋輩)1 【友・なじみ】ホウユウ(朋友)1 【主客】オキヤクサマ(お客様)1
	人物	【人種・民族】ニツポンジン(日本人)4、ワジン(和人)1、オランダジン(オランダ人)2 【国民・住民】タミ(民)1 【君主】ニョテイ(女帝)2、ワウ(王)2 【社会階層】ヒヤクシヤウ(百姓)4、フシ(武士)2、ヒンミン(貧民)1 【人物】セキガク(碩学)2、オロカモノ(愚か者)1、グニン(愚人)1、キチガイ(氣違い)2、ツヨキモノ(強者)2、ビヤウシヤ(病者)1、カイノク(海賊)2、ヌスビト(盗人)1、コジキ(乞食)6 【固有人名】ビクトリア(女帝ビクトリア)1
	成員	【専門的・技術的職業】デモイシヤ(藪医者)1、サウウ(座頭)2 【管理的・書記的職業】ダイカン(代官)2 【運輸業】センドウ(船頭)2、フネ(ママ)ノリ(船乗り)1、ムマカタ(馬方)1 【職人】コウヤ(紺屋)2、シヨクニン(職人)2、カナホリ(金堀り人夫)2 【サービス】ウカレメ(浮かれ女)1、ユウジヨ(遊女)1 【相対的地位】シ(師)1、トモ(供=従者)1、ヤイビト(雇い人)2
	公私	【国】ガイコク(外国)5、バンコク(万国)2 【都会・田舎】ミヤコ(都)2 【固有地名】ワコク(和国)2、モロコシ(唐土)1、カラフト(樺太)2、コロバ(コ ロッパ)1、イギリスゴク(英国)1、テウセン(朝鮮)2、カナガワ(神奈川)2、サド(佐渡)2、ナガサキ(長崎)2、マツマイ(松前)2、ロンドン1、アサクサ(浅草)2、ニホンバシ(日本橋)2
	社会	【社会・世界】セカイ(世界)2 【事務所・市場・駅など】ミナト(港)5 【店・旅館・病院・劇場など】チャヤ(茶屋)2、ハタゴヤ(旅館)2

独自文には使用されていない中項目「機関」は、表2から除いた。

「人間活動の主体」は5部門の中で最も語数が少ないが、上述のように独自文に語が集中している中項目が見られる。

中項目「人物」の下位分類で最も語数が多いのは「人物」で、オロカモノ、グニンのような人の性質やカイゾク、ヌスビトのような生業を表す語が見られる。丁寧体にはオロカモノ、普通体にはグニンが使用されており、類義語を示す意図があったとみられる。

「人種・民族」ではオランダジン、「君主」ではニョテイ、「固有人名」ではビクトリアのような語が見られるが、これらは医療知識や世界情勢を伝える例文で提示されている。『会話日本語』の編纂目的は「日本語の知識を得たい人々に役立つ」ことであるが、日本人に対しても有益であるよう計画されたものと考えられる。

中項目「公私」には、居住地であるカナガワ、江戸のアサクサやニホンバシ、カラフトのような「固有地名」が見られる。外国についてはヨロッパ、イギリスゴク、ロンドンがあるものの、アメリカの都市名は見られない。

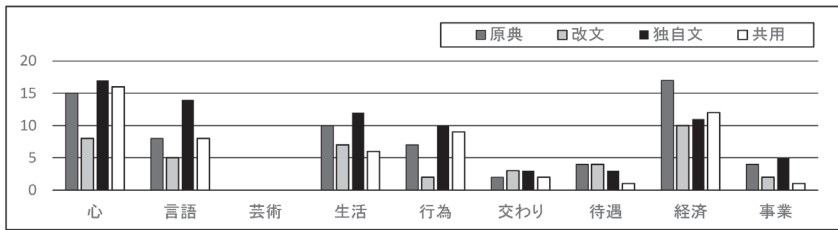
中項目「成員」にはデモイシヤやダイカンのような語が見られるが、外国

人に直接対応する日本人の官職は示されていない。

ブラウンは人物の性質、生業、地名を具体的に示すことに重点を置いたと考えられる。しかし、ブラウンの母国であるアメリカの都市名は提示されていない。また、外国人に関連のある日本の機関や直接対応する官職が独自文には提示されていない。

4-3. 人間活動—精神および行為

グラフ4：部門「人間活動—精神および行為」の名詞の分布



部門「人間活動—精神および行為」の異なり語数 238 語のうち独自文の語数は 75 語で 31.5% を占めている。中項目は、グラフのように 9 項目ある。独自文を概観すると、「心」の語数が最も多く、次いで「言語」、「生活」、「経済」の順になっている。

表3：独自文「人間活動—精神および行為」の名詞一覧表

部門	中項目	独自文【分類項目】名詞(漢字・意味)度数
人間活動— 精神および 行為	心	【感情・気分】キゲン(機械)1 【好悪・愛憎】ナサク(情け)2、キヅカイ(氣遣い)2 【意志】アケジャウ(悪情)2、ガ(我)2 【道徳】ムドウ(無道)2 【思考・意見・疑い】ココロエチガイ(心得違い)2、ウタガイ(疑い)2 【注意・認知・了解】ユダシ(油断)1 【比較・参考・区別・選択】ヨリドリ(選り取り)1 【研究・試験・調査・検査など】キンミ(吟味)2 【決心・解決・決定・迷い】マヨイ(迷い)2 【論理・証明・偽り・誤り・訂正など】イツワリ(偽り)1、ウソ(嘘)2 【原理・規制】オキテ(徒)1 【方法】ミテ(道=方法)1、ホウシキ(方式)2
	言語	【翻訳】ワゴエヤク(和語英訳)2 【語】ワゴ(和語)1 【文字】モジ(文字)2、オン(音)2 【話・談話】コウジヨウ(口上)2 【書き】ケツパン(血判)4、フウイン(封印)2 【文書】ユズリジヨウモン(譲証文)1、シヤウモン(証文)2、シンモン(神文)2、ヤククガキ(約束書)1、カリガキ(仮書き)2 【文献・図書】オホジビキ(大辞引)2、ジビキ(辞引)2
	生活	【人生・幸福】サイワイ(幸い)2、フカウ(不幸)2 【労働・作業・休憩】イツク(一服)2 【食生活】ヒルゴハン(昼ごはん)2 【保健・衛生】カネ(銭票=お唐黒)1 【結婚】ゲンブク(元服)1、ヨメイリ(嫁入り)1 【行事・式典・宗教的行事】マツリ(祭り)2、クワソウ(火葬)2、オガミ(拝み)1 【旅・行業】カリ(祭り)2 【口・鼻・目の動作】マバタキ(瞬き)2
	行為	【才能】ハクガク(博学)2、ハクシキ(博識)1 【威厳・行儀・品行】ギヤウジャウ(行状)1、ケンイ(權威)2 【行為・活動】コウジ(好事)1、アタシ(悪事)1 【犯罪・罪】ヒトゴロシ(人殺し)2 【成功・失敗】コウ(功)2、ソゾク(租相)2、フシマツ(不始末)2
	交わり	【出欠】リアイ(乗合船)2 【釣車】オホヒ(蟹)2 【戦争】タタカイ(戦い)2
	待遇	【刑】セツク(切腹)1 【命令・制約・服従】キンゼイ(禁制)1 【待遇】ケンソン(謙遜)1
	経済	【経済—経済—収支】サンザイ(取財)2、ロウヒ(浪費)1 【税】ネンゴ(年貢)2、カリヤウ(過料)1、カリヤウキン(過料金)2 【資本・金融】ケンギン(現金)2 【価格・費用】アタヘ(値)2 【授受】ホドコシ(施し)2、ミツギ(貰)2、ウケトリ(受け取り)1 【豊富】ヒンキウ(貧窮)1
	事業	【建設・土木】チギヤウ(地形)2 【建築】フシン(音請)2 【医療】リヨウジ(療治)1 【染物・洗濯など】ソメノ(染物)2 【炊事・調理】ナマヤク(生焼け)2

「会話文集」には使用されていない中項目「芸術」は、表3から除いた。中項目「心」は特定の分類項目に偏ることなく、各分類項目に語が広く分

散している。自他の心を表現する語を重視した結果といえる。

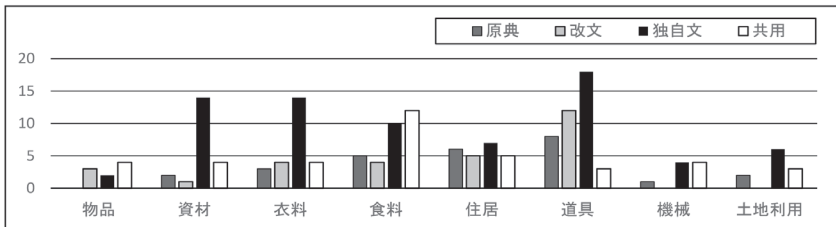
中項目「言語」の下位の分類項目「文書」では5語が提示されている。ブラウンは文書の種類を重要視していたと考えられる。「文書」に加え、下位分類「書き」でもケツパン、フウインのように文書に関わる名詞が見られる。

中項目「生活」には、カネ、ゲンブクのような日本の文化、風習に関わる名詞が見られる。また中項目「経済」でも、ネング、カリヤウのような日本の税、罰則など制度に関わる名詞が見られる。

ブラウンは日本の文書、文化や風習、制度に関わる名詞を独自文で提示している。

4-4. 生産物および用具

グラフ5：部門「生産物および用具」の名詞の分布



部門「生産物および用具」の異なり語数 170 語のうち独自文の語数は 75 語で 44.1% を占めている。中項目は、グラフのように 8 項目ある。独自文を概観すると、語数は「道具」が最も多く、次いで「資材」「衣料」、「食料」の順になっている。

表4：独自文「生産物および用具」の名詞一覧表

部門	中項目	独自文【分類項目】名詞(漢字・意味)度数
生産物 および 用具	物品	【物品】カワリ(=代品)1【持ち物・売り物・土産など】コウエキモノ(交易物)1
	資材	【資材・ごみ】ハガミ(端紙)2、ゴミ(ごみ)1【木・石・金】イン(石)2【燃料・肥料】タキギ(薪)2、スミ(炭)4【ゴム・のり・油など】エニアブラ(柱油)2、トラユ(桐油紙の略)1、ロウ(蠟)1【柄・つえ・へらなど】エ(柄)2【ばね・栓など】オモリ(錘)2【コード・縄・網など】ナハ(縄)1、ユヅル(弓弦)2、サシ(縄)2【飾り】カザリ(飾り)2
	衣料	【衣料・綿・革・糸】キヌイト(絹糸)1【布・布地・織物】ボロ(ぼろ)1、カナキン(金巾)2、チリメン(縮緬)2、ピロウド(ピロード)2【上着・コート】ミノ(蓑)2、ハカマ(袴)2【帽子・マスクなど】カムリモノ(被り物)2、メン(お面)2【ネクタイ・帯・手袋・靴下など】ハラオビ(腹帯)2【履き物】クツ(靴)1、ナガグツ(長靴)1【雨具・日よけなど】カサ(傘)2【装身具】サナダヒモ(真田紐)2
	食料	【食料】タベモノ(食べ物)2、クイモノ(=餌)1、タベモノ(=餌)1、コウブツ(好物)2【料理】パン3、アブリモノ(炙りもの)1【魚・肉】サカナ(魚)2【調味料・こうじなど】ス(酢)2【薬剤・薬品】イレボウソウ(入れ歯痛=種痘)2【化粧品】カウ(香)2
	住居	【住居】アナ(穴)2【家屋・建物】クラ(蔵)2【部屋・床・廊下・階段など】ユカ(床)1【屋根・柱・壁・窓・天井など】ジツク(地覆)2【戸・カーテン・敷物・畳など】スタシ(簾)【家具】ツクエ(机)2、カネバコ(金庫)4、ドウグ(道具)2
	道具	【器・ふた】フタ(蓋)2【瓶・筒・つぼ・膳など】ツツクリ(徳利)2【袋・かばんなど】ジャウクロ(状袋)2【かご・俵など】カゴ(籠)2【食器・調理器具】ナベ(鍋)1、カマ(釜)1【文具】スミ(墨)2、スズリイン(硯石)2、チャウギ(定規)2【農具】クマデ(熊手)1、ホ(帆)1【日用品】ハナフキ(漢拭き)2【刃物】ワキザシ(脇差)2、ヨキ(斧)2、ヤリ(槍)2【楽器・レコードなど】ナリモノ(楽器)2、カネ(鉦)2
	機械	【乗り物(海上)】ワタシブネ(渡し船)2、ドウノマ(胴の間・船の内室)2、トモ(船尾)2、ヘサキ(船)2
	土地 利用	【地類(土地利用)】タ(田)4【道路・橋】カイドウ(街道)1、ホンドウ(本道)1、ミチバタ(道端)2、ハン(橋)1【その他の土木施設】ドブ(溝)3

部門「生産物および用具」の中項目「資材」「衣料」の語は、独自文に集中している。

中項目「道具」には、フタ、ヂヤウギ、クマデ、ハナフキのような実生活に必要な語がある。中項目「資材」にはトヲユ、サシのような日本特有の物品があり、日本で収集されたことがわかる。

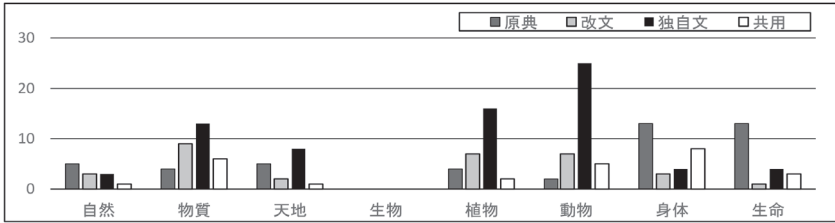
また中項目「衣料」には、カナキン、チリメン、ピロウドがあり、布生地の特性の説明や購入場面を想定した例文に使用されている。洋装に必要なカムリモノやナガグツも見られるが、使用人に指示する例文に提示されている。なお、ハラオビは馬に鞍をつけるために締める帯である。中項目「機械」に船に関する名詞が見られるが、船と馬は実際に使用する交通手段であり、使用人に指示を与えるために獲得する必要があった名詞と考えられる。

その一方で中項目「食料」はタベモノ、サカナのような総称が見られるのみで、下位語にあたる具体的な名詞が提示されていない。中項目「食料」には薬剤・薬品、化粧品の下位分類があり、イレボウソウ、カウが見られる。イレボウソウは、医療知識を伝えるために使用された語である。

ブラウンは独自文で生活に密着した名詞を提示しているが、中項目「食料」のサカナのように独自文の特徴がみられない意味分野もある。

4-5. 自然物および自然現象

グラフ6：部門「自然物および自然現象」の名詞の分布



部門「自然物および自然現象」の異なり語数 177 語のうち独自文の語数は 72 語で 40.1% を占めている。中項目は、グラフのように 8 項目ある。独自文を概観すると、語数は「動物」が最も多く、次いで「植物」、「物質」の順になっている。

表5：独自文「自然物および自然現象」の名詞一覧表

部門	中項目	独自文【分類項目】名詞(漢字・意味)度数
自然物および自然現象	自然	【光】イナビカリ(稲光)1 【色】ヒ(絳)2 【味】アジ(味)2
	物質	【元素】アカガネ(銅)2、イウウ(硫黄)2、【鉱物】エンシヤウ(煙硝)2、シヤウセキ(硝石)2、タマ(玉)2 【さび・ちり・煙・灰など】サビ(錆)1 【風】オホカゼ(台風)1、タイフウ(台風)1、ハヤテ(疾風)2 【雲】ウキグモ(浮雲)2 【天気】テンキ(天気)1、ヒヨリ(日和)1 【熱】ナマニエ(生煮え)2
	天地	【宇宙・空】テンチベン(天地辺)1 【天体】リウセイ(流星)2、ハウキボシ(彗星)2 【山野】ノナカ(野中)2 【海・島】カイガン(海岸)1、カイベン(海辺)1 【地相】ハヤシ(林)2、ドウザン(銅山)2
	植物	【木本】カシ(榎)2、ビヤクダン(白檀)2、ボタン(牡丹)2、ウルシ(漆)1、ハジ(櫨)1 【草本】ケトウウ(鶏頭)2、ナデシコ(撫子)2、ナタネ(西洋油菜)1、カラスムギ(カラス麦)2、モロコシ(玉蜀黍)1、ネギ(葱)2、ユリ(百合)2 【枝・葉・花・実】タマ(=球根)2、ハ(葉)1、ハナ(花)4
	動物	【哺乳類】ケダモノ(獣)2、ヨツアシ(=動物)1、シソク(=動物)1、シシ(獅子)2、トラ(虎)2、ウサギ(兎)2、アカイマ(赤毛馬)2、イジシ(猪)1、オホジカ(大鹿)2、シカ(鹿)1、トナカイ(馴鹿)2、オウシ(牡牛)2 【鳥類】アヒル(家鴨)1、カモ(鴨)1、ガン(雁)2、キジ(雉)1、ウズラ(鶉)1、ツル(鶴)2、ヤマハト(山鳩)1 【魚類】シヤケ(鮭)2 【昆虫】ミ(蜜)2、ハイ(蠅)2 【その他の動物】カタツムリ(蝸牛)1、タコ(蛸)2、マイマイツブリ(蝸牛)1
	身体	【胸・背・腹】カタ(肩)2、コシ(腰)2 【手足・指】リヤウテ(両手)2 【皮・毛髪・羽毛】マユ(簾)1
	生命	【生理】ミヤク(脈)2 【障害・けが】キンガン(近眼)1、ドモリ(吃)2 【病氣・体調】ヒヨウソ(瘵痘)2

「会話文集」に 1 語も使われていない中項目「生物」は表 5 から除いた。

部門「自然物および自然現象」を考察すると、中項目「動物」と「植物」の語数は独自文に集中している。

部門の中では中項目「動物」の語数が最も多く、下位分類ではイノシシ、シカのような哺乳類、キジ、ウズラ、ツルのような鳥類について豊富に語を提示している。トナカイはアイヌ語に由来する語で、『和英語林集成』では 3 版に収録されている。その他の動物ではカタツムリ(丁寧体)、マイマイ

ツブリ（普通体）が提示されている。江戸時代の方言を収集した『物類称呼』では、江戸の俚言として「まいまいつぶり」が挙げられており、日本語教師の影響がうかがえる。しかし、魚類についてはシヤケ 1 語にとどまっている。

中項目「植物」では、ナタネ、カラスムギ、モロコシのように食材となる語が見られる。また、植物の部位についても、タマ、ハ、ハナのような名詞が提示されている。

中項目「物質」の下位分類には元素がありアカガネが見られる。鉱物ではイワウ、エンシヤウ、シヤウセキのような火薬の製造に関わる語が見られる。

国によって主要な動物、植物には異なりがあるが、独自文では日本に生息する動物、食材となる植物を提示している。また、火薬の原料のように知識を伝えるための名詞も提示されている。しかし、中項目「動物」の下位分類魚類のように、独自文の特徴がみられない意味分野もある。

5. おわりに

本稿では、ブラウンが「会話文集」編纂のために『原典』に加えた独自文に対応する日本語例文には日本に特化した名詞が提示されていると推測し、その特徴を明らかにするために、名詞を意味分野に分類して考察した。

これにより、次のような特徴が明らかになった。

- (1) 日本での日常生活に必要な名詞が具体的に示されている
- (2) 日本の文化や風習、時刻制度や税制度、罰則に関する名詞が示されている
- (3) 日本に生息する動物、食材となる植物が具体的に示されている

独自文の名詞の特徴から、ブラウンは生活に密着した実用性の高い語を豊富に提示することを編纂方針のひとつとしていたと考えられる。この点は、独自文に使用される名詞の数が他の文のタイプに比べて多いこと、丁寧体・普通体 2 種の日本語例文で異なる名詞を提示する場合があることから明らかである。部門「生産物および用具」には日本で収集された名詞も見られる。ただし、部門「人間活動の主体」の中項目「機関」「成員」、部門「自然物および自然現象」の中項目「動物」の下位分類魚類のように、独自文の特徴が

みられない意味分野もある。また、2種の文体で位相を表しているが、名詞においては文体ほど明確な位相差が認められない。名詞の位相については別稿で明らかにしたい。

さらに、英語母語話者に対して日本に関する知識を提示するだけでなく、日本人に対しても有益な情報を提示していることが明らかになった。

(4) 世界情勢や医学・化学、西欧の文化に関する名詞が示されている
 今後の課題としては、改文、共用に含まれる日本に特化した名詞を考察することが挙げられる。ブラウンが「日本語の知識を得たい人々に役立てるため」に収録した名詞の特徴を明らかにするため引き続き研究を進める。

[参考文献]

- 穎原退蔵著・尾形侑編 (2008) 『江戸時代語辞典』 角川学芸出版
 カイザー, シュテファン (2017) 「S.R. Brown *Colloquial Japanese* の成立事情—*Lexilogus* との関連を中心に」 『國學院雑誌』 118—3 國學院大學
 加藤知己・倉島節尚 (1998) 『幕末の日本語研究 S.R. ブラウン 会話日本語—複製と翻訳・研究—』 三省堂
 グリフス, ウィリアム・エリオット (1991) 『ヘボン—同時代人の見た—』 佐々木晃訳 教文館
 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表—増補改訂版』 大日本図書
 阪倉篤義 (1960) 「萬葉語彙の構造—(その1) 名詞について—」 『萬葉』 34 萬葉学会
 佐藤享 (1990) 『江戸時代語の研究』 桜楓社
 小学館国語辞典編集部 (2006) 『日本国語大辞典』 精選版 小学館
 杉本つとむ (1999) 『西洋人の日本語研究』 八坂書房
 高谷道男 (1961) 『ヘボン』 吉川弘文館
 高谷道男編訳 (1965) 『S.R. ブラウン書簡集』 日本基督教団出版部
 田島毓堂 (1999) 『比較語彙研究序説』 笠間書院
 田中章夫 (1978) 『国語語彙論』 明治書院
 常盤智子 (2016) 「ブラウン著 *Colloquial Japanese*. とその底本」 『近代語研究』 19 近代語学会

中道真木男 (1983) 「日本語教育の基本語彙とその辞書」『日本語学』2 - 6 明治書院

飛田良文 (1977) 「英米人の習得した江戸語の性格」『国語学』108 日本語学会

飛田良文 (2010) 「S.R. ブラウン著 "Colloquial Japanese" の成立事情 (1)」『東日本英学史研究』9 日本英学史学会東日本支部

バラ, マーガレット・テイト・キンニア (1992) 『古き日本の瞥見』川久保とくお訳 有隣堂

ヘボン, ジェームズ・カーチス, 飛田良文・李漢燮編 (2000) 『和英語林集成: 初版・再版・三版対照総索引』港の人

本間美奈子 (2013) 「ブラウン『会話日本語』の助詞を伴わない人称詞について」『言語文化研究』12 静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会

前田勇編 (1974) 『江戸語大辞典』講談社

松村明 (1970) 『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版

吉川雅之 (2011) 「レッグ編 Lexilogus に記される粵語音の表記と体系」『東洋文化研究所紀要』160 東京大学東洋文化研究所

吉澤義則撰 (1933) 『校本物類称呼諸国方言索引』立命館出版部

Brown, Samuel Robbins (1863) *Colloquial Japanese, or conversational sentences and dialogues in English and Japanese, together with an English-Japanese index to serve as a vocabulary, and an introduction on the grammatical structure of the language.* By Rev. S. R. Brown, A. M. Shanghai: Presbyterian Mission Press.

Legge, James (1841) *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages; Comprehending the Vernacular Idioms of the Last in the Hok-keen and Canton Dialects.* Printed at the Anglo-Chinese College Press. Malacca

謝辞 本稿は 2015 年語彙研究会大会 (第 13 回大会) および 2016 年國學院大學国語研究会前期大会での口頭発表をもとにまとめたものです。会場において貴重なご指摘を賜りました。記して感謝申し上げます。